

## 【ばくちいのち】

ぼくはこどもだから、博打（ばくち）はやらないが、賭けるのは大好きです。  
たとえば小学校の仲間と、先生が教室に、右足から入ってくるか左足から入ってくるか、なんて賭けはしょっちゅうやっている。  
のちに「人生は賭けである」と断言するぼくの、賭けの最初の季節であります。

それはともかく、村には【ばくちうち】ではなく、その親分格の【ばくちいのち】という、気味のわるいおやじのおばけがいて、とにかく博打が命。

このおばけ、もしくはおばけと呼ばれている人間がいるせいで、村から博打がなくならないという者も多くいるほどです。

この【ばくちいのち】の女房が、儉約家のできた人なので、なんとか暮らしを維持しているのですが、ある夜こんなことがあったと、懐爺からききました。

花札賭博（はなふだとぼく）から帰ってきた【ばくちいのち】は、超ご機嫌で、「女房喜べ」

女房は、旦那が花札賭博で、おお勝ちしたとおもい、

「それなら旦那、勝った分の一割を家計に頂戴」

「こら女房、だれが勝ったといった。賭けには負けた。だが、えらく儲かった」

「どういうことですか、旦那」

「お前に十万円で買ってあげた簪（かんざし）、あれを花札賭博の胴元が二十万で扱ってくれた。その二十万をつぎこんで、賭けに負けてすからかんになったが、おれは、十万儲けたってことよ。わかるか女房、この理屈」

「それは旦那、よかったですね。儲かった儲かった」

「ほんとなら、十万の借金ができていたところ、借金なしで帰ってこられたぞ、女房」

「さすがは旦那、今夜は祝杯ですね」

「あたりきよ、女房。十万飲んでも、ちゃらだ」

ぼくは唸りました。

博打やるなら、こういう旦那でなくちゃいけない。

博打やるなら、こういう女房をもらわなくちゃいけない。